

ピエール・ベールの寛容論
——その無神論評価とスピノザ像をめぐって——
中河 豊 (名古屋芸術大学)

P. ベール(1647- 1706)は、ルイ 14 世統治下のナント勅令廃止とプロテスタント (ユグノー) 弾圧という時代状況に論争的に介入し、宗教的寛容を徹底的に思索した。

「有徳な無神論者」というベールのスピノザ像は、スピノザ哲学の理解と受容の歴史において大きな影響力を有した。ほぼ 1 世紀後に、これはヘルダーの「形而上学的道徳的夢想家」というスピノザ像により覆される。ドイツ汎神論論争を契機としたこの変化は、合理主義からロマン主義への思想的発展を反映している。

今回の発表では、「有徳な無神論者」という「逆説」がベール独自の無神論理解を基礎にしていること、理性の光による実践的規範確立の試みが無神論理解として展開されていること、これらの点を明らかにしたい。

ベールは『彗星雑考』(1683 年)において彗星を不幸の予兆とみなす偶像崇拝的迷信を批判し、「有徳に生きる無神論者」さらに「無神論者たちの社会」を肯定的に議論する。彼によれば、宗教的知は道徳の基礎とはならず、「神についての知識」を欠く人々が「誠実さの諸規則」を着想してこれを守ることができる。

したがって、道徳的問題は、宗教的次元では成立しない。ベールの議論の一つの次元は経験である。憐憫、節制、温厚への傾向などの徳は、気質、習慣、教育など経験的動機から生じる。このかぎりでは、信仰の有無は道徳に係わらない。

別の議論の次元は実践的な理性使用である。『彗星雑考』では宗教的知識を人間の行為の原因と見なす立場は退けられた。ナント勅令廃止(1685 年)とユグノーに対する改宗強制を批判する意図で執筆された『「強いて入らしめよ」とのイエス・キリストの言葉に関する哲学的注解』(1686 年)は、理性＝自然の光を道徳的領域で使用し、謙讓、攻撃の忘却、禁欲、隣人愛などを「正しい理性の純粋な諸観念によって確証された規則」、「全ての真理と正しさの原初的で本源的な規則」と指摘する。

このように、神学的思弁ではなく、実践的な理性使用が寛容な社会を見通すことができる¹。

¹哲学史的にはこの主題はカントによる理性批判として定式化されることになる。Cf. Pierre Bayle, DE LA TOLÉLANCE, édité par Jean- Michel Gros , Paris 2014, p. 24.